

令和元年6月7日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K15925

研究課題名(和文) 世代間アンビバレンス概念から分析する育てにくい子どもをめぐる家族保健機能の構造

研究課題名(英文) Analysis of the functional structures of a healthy family related to childrearing difficulty based on the concept of intergenerational ambivalence

研究代表者

山崎 あけみ (Yamazaki, Akemi)

大阪大学・医学系研究科・教授

研究者番号：90273507

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、家族保健機能のひとつであるコミュニケーションに着目し、産後1ヶ月間の母親からみた家族コミュニケーションの実態と育児困難感との関連の検討を目的とした。近年の家族を取り巻く状況を踏まえた家族コミュニケーション尺度を開発し、その実態および育児困難感との関連要因を提示した。産後1ヶ月の家族は、対面だけでなく、携帯電話を駆使して多彩な家族内部・外部コミュニケーションを行っていた。友人との対面、実母との通話が多いほど、より低い育児困難感に関連していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

家族保健機能のひとつであるコミュニケーションは、近年、スマートフォンの急速な普及により多様性が増している。本研究では、産後1ヶ月間という子育ての移行期に、夫婦が祖父母世代や友人などと対面・非対面(メール・通話・テレビ電話など)の多彩な手段を駆使して育児に取り組んでいる実態が明らかになった。また、祖父母世代や育児仲間との「ゆるくつながる」支援が近年の夫婦にとって特徴的なこととして抽出された。

研究成果の概要(英文)：This study focused on communication, one function of a healthy family, with the goal of considering issues related to family communication status and childrearing difficulty from the perspective of mothers, one month postpartum. After developing a family communication scale based on the circumstances surrounding modern families, the related factors of the actual conditions of this scale and feelings of difficulty related to childrearing were identified. In the one-month postpartum families analyzed, in addition to face-to-face communication, the family members also used cell phones for a wide range of both internal and external communication. More face-to-face meetings with friends and phone conversations with their birth mothers tended to correlate with a lower sense of childrearing difficulty among the postpartum mothers.

研究分野：医歯薬・家族看護学

キーワード：家族機能 コミュニケーション 育児 家族看護

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

「健やか親子 21 (第 2 次)」の重点課題の一つとして「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」が提示されている<sup>1)</sup>。特に産後 1 ヶ月は新しい家族員をむかえ、家族システムを再構築していく時期である。家族ライフイベントに対して、従来、家族は、世代間の連携の強弱が健康の鍵を握るという前提のもとに、現場の看護職は、育児については親世代に、介護については成人子に対して支援を求め、世代間関係の連帯感をうむかわりを模索し提供してきた。事実、祖父母世代からの若い夫婦への育児について彼らの意思決定を見守りつつの適度な支援や、老親の在宅介護において、早期からの成人子を交えての退院調整は、世代間関係の連帯感を強める看護実践として一定の効果を示している。

しかし、現代家族の特徴である、高齢化・小規模化・多様化・個人化傾向は、従来なら世代間で連携を強め、対処できていた家族ライフイベントに対して、世代間の葛藤や緊張を生じさせ、連帯感を強めれば対処できるという発想だけでは限界である<sup>2)</sup>。即ち、家族保健機能は、近年の家族を取り巻く社会の現状を踏まえて、例えばどのような家族資源を有するのか、どのような規範・価値で行動するのかは多様化し変化しているので実態の把握が必要である。

育児困難を抱く子どもについては、子どもの気質を中心に研究が蓄積されている。育てにくさの現象は、子どもの気質にだけ起因するものでなく、母親や父親の行動特徴や養育態度そして、家族保健機能とも深く関連している。

そこで本研究では、家族保健機能の中でも、コミュニケーションに着目する。近年の子育て家族は、携帯電話の利用などで従来のような対面による支援だけでなく、多彩なコミュニケーション方法により、家族内外、世代間で相互作用し、それを踏まえた育児支援を行っていることが予測されるからである。

### 2. 研究の目的

家族コミュニケーションの家族内部(夫婦・祖父母)と家族外部(友人・ソーシャルメディア)を対面・非対面の両側面から調査し、その方法と内容の検討を行ない、産後 1 ヶ月間の育児に関する家族コミュニケーションの実態を質的に明らかにすること。

の結果をふまえた尺度を開発し、その実態を量的にも明らかにすること。

産後 1 ヶ月の母親からみた育児困難感と家族コミュニケーション、母親の属性、産後 1 ヶ月の生活状況との関連を明らかにすること。

### 3. 研究の方法

2016 年 10 月 11 月の期間に、研究協力病院の産後 1 ヶ月健診に来院した、母親とその夫、又はその実母もしくは義母とのペア 10 組に対して、産後 1 ヶ月間のコミュニケーションについて半構造化面接を行った。インタビューは同意のもとに IC レコーダーに録音し、逐語録を作成しフィールド・リサーチの手法による質的因子探索を行った。

および 2017 年 2 月 7 月の期間に、研究協力病院の産後 1 ヶ月健診に来院した母親 500 名に質問紙調査を依頼した。産後 1 ヶ月間の家族コミュニケーション尺度を、石井<sup>3)</sup>により未就園児を持つ親を対象に作成された尺度の項目(対話・通話・メール)を参考にその結果を分析した上で開発し、子ども総研式・育児支援質問紙「育児困難感」「Difficult baby」の 2 領域<sup>4)</sup> FAD 日本語版<sup>5)</sup> JIAT<sup>6)</sup> EPDS<sup>7)</sup> 等とともに自己記入式調査票を実施した。産後 1 ヶ月健診に来院した母親に口頭と書面で調査依頼を行い、承諾を得た母親に、診療の待ち時間に、調査を依頼し、回収 BOX への投函をもって同意を得たとした。

### 4. 研究成果

インタビュー時間は平均 33.9±6.0 分(27~43 分)、母親の平均年齢は 33.3±3.5 歳(28~40 歳)で初産婦 7 名、経産婦 3 名であった。参加者 10 組の内訳は、母親と実母が 6 組、夫婦が 3 組、母親と義母が 1 組であった。

産後 1 ヶ月の母親の家族コミュニケーションの実態として、その方法を 5 つに分類できた。〔対面〕〔通話〕〔メール:個別コミュニケーション〕〔SNS:特定の人との集団コミュニケーション〕〔SNS:不特定の人とのコミュニケーション〕であった。内容は育児の悩みや心配事を相談・傾聴することが多かった。近年の産後 1 ヶ月の不規則な生活を送る母親やその家族は、現代のコミュニケーションツールの多様化に伴い、様々な方略で家族コミュニケーションを行うことが可能となっていた。

Family Communication Questionnaire (FCQ)を産後 1 ヶ月間の家族コミュニケーションを測定するために開発した。399 名(回収率 79.8%)の女性を対象のデータから信頼性(Cronbach's $\alpha$  = 0.8)と FAD-GF との併存妥当性(-0.3,  $p < 0.01$ )が検証された。また、産後 1 ヶ月間の育児困難感の関連要因としては、世代間別の家族コミュニケーションの違いにより検討した結果、35 歳以上の初産婦では実母と通話得点が高く、また 34 歳以下ではパートナーとのメール得点が高いほど、育児困難感が低かった。

産後 1 ヶ月の母親の育児困難感と家族保健機能のなかでも家族コミュニケーションに焦点

をあてて自己記入式調査票を実施した。回収数 496 名 (回収率 99.2%) から協力が得られ基本的な解析を実施した。有効回答数 378 名 (有効回答率 76.2%) を分析対象とした。属性は、年齢 34.3±4.4 歳 (初産 33.5±4.8 歳、経産 35.0±3.9 歳)、初産 192 名 (50.8%)、帝王切開 127 名 (33.6%)、大卒以上 239 名 (63.2%)、実家への里帰り 184 名 (48.7%) であった。

単変量解析の結果、育児困難感は、大卒以上 ( $P<.01$ ) が有意に高く、EPDS ( $P<.01$ ) Difficult baby ( $p<.01$ )、JIAT ( $P<.01$ )、FAD-GF1 ( $P<.01$ ) FAD-GF2 ( $P<.01$ ) で正の相関があり、得点が高いと有意に高くなる傾向が見られ、経済状態で負の相関があり、有意に低くなる傾向が示唆された。重回帰分析の結果、調整済み  $R^2 = .458$  となり 6 項目得られた。産後 1 ヶ月の母親の育児困難感は、家族コミュニケーションの友人対面と実母通話での得点が高いことが、より低い育児困難感に関連し、また EPDS、Difficult baby、FAD-GF2 (生殖家族)、JIAT の得点が高いことが、より高い育児困難感に関連していた。友人との対面や実母との通話の利用が多いほど育児困難感が低くなっていた。産後 1 ヶ月は自宅安静だが、家族外部の友人と対面で育児相談や情報交換し、家族内部の実母と通話することで、家族コミュニケーションが豊かとなり家族システムの安定化への寄与が示唆された。

#### <引用文献>

1. 厚生労働省：健やか親子 21 (第 2 次) 2017, <http://sukoyaka21.jp/about>, 2017.11.10 アクセス
2. 田淵六郎 少子高齢化の中の家族と世代間関係 - 家族戦略論の視点から - 家族社会学研究 24(1)37 - 49 2012
3. 石井クンツ昌子 情報社会における育児期の親の IT 利用と家族関係：日米比較から 平成 22 年度 - 24 年度科学研究費補助金基盤研究 B 研究成果報告書 2013
4. 川井尚, 庄司順一, 千賀悠子ほか 子ども総研式・育児支援質問紙(ミレニアム版)の手引きの作成 日本子ども家庭総合研究所紀要 37 : 159 - 180 2001
5. 佐伯俊成, 飛鳥井望, 三宅由子 Family Assessment Device (FAD)日本語版の信頼性と妥当性、精神科診断学, 8(2) : 181 - 192 1997
6. 長田洋和, 上野里恵 日本版インターネットアディクションテスト (JIAT) の有用性の検討 . アディクションと家族, 22(3) : 269 - 275 2005 .
7. 岡野禎治, 村田真理子, 増地聡子ほか 日本版エジンバラ産後うつ病自己評価票 (EPDS) の信頼性・妥当性 精神科診断学 7(4) : 525 - 533 1996

#### 5 . 主な発表論文等

##### [雑誌論文](計 3 件)

1. Tae Kawahara, Kanako Matsueda, Maiko Yasuzato, Akemi Yamazaki (2019) Modification and initial testing of the Family Communication Questionnaire (FCQ) for Japanese child-rearing families in the period one month postpartum, Journal of Nursing Education and Practice 9(6) 7-13 DOI <https://doi.org/10.5430/jnep.v9n6p7> (査読有)
2. 松枝加奈子, 菊池良太, 山崎あけみ (2019) 産後 1 ヶ月間の母親の家族コミュニケーションの実態と育児困難感に関連する要因 家族看護研究 24(2) 164 - 173 DOI [http://square.umin.ac.jp/jarfn/kikanshi/24-2/24\\_2\\_4.pdf](http://square.umin.ac.jp/jarfn/kikanshi/24-2/24_2_4.pdf) (査読有)
3. 松枝加奈子, 山崎あけみ, 白岩八千代, 有松有希子, 伊達文子, 畑山博(2017) 新しく家族員を迎える産後 1 ヶ月間の家族コミュニケーション 京都母性衛生学会誌 25(1) 11-20 (査読有)

##### [学会発表](計 6 件)

1. Kawahara T., Matsueda K., Kikuchi R., Yasuzato M., & Yamazaki A. (2018) Instrument development: Family communication questionnaire (FCQ) for the one-month postpartum period of Japanese childrearing families (21th East Asian Forum of Nursing Scholars: EAFONS), Seoul, South Korea.
2. 安里舞子, 松枝加奈子, 菊池良太, 山崎あけみ (2018) 産後 1 ヶ月の家族コミュニケーションの内容と手段に関する実態 - 自記式質問紙を用いた横断研究 - 第 25 回日本家族看護学会学術集会 (高知市)
3. 松枝加奈子, 白岩八千代, 安藤光子, 石井直子, 佐々木理江, 畑山博(2018) 高年初産婦の産後 1 ヶ月における世代間別の家族コミュニケーションと育児困難感に関連する要因 - 高年初産婦と 34 歳以下初産婦 - 第 59 回日本母性衛生学会学術集会 (新潟市)
4. 松枝加奈子, 白岩八千代, 安藤光子, 石井直子, 佐々木理江, 畑山博 (2018) 育てにくい子どもをめぐる産後 1 ヶ月間のインターネット利用に対する思い 第 59 回日本母性衛生学会学術集会 (新潟市)

5. 松枝加奈子, 菊池良太, 山崎あけみ(2017) 産後1カ月間の「育てにくい子ども」をめぐる家族コミュニケーションの構造 The 3rd JSMMR Annual Conference, Tokyo, Japan.
6. Yamazaki A, Matsueda K, Yasui N (2016) Discussion on the theoretical constructs concerning family communication regarding Difficult-to-Raise Children: Internal family interactions and external family interactions, Japan society for Mixed Method Research Association Regional Conference, Tokyo, Japan.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

菊池 良太 (KIKUCHI, Ryota) 大阪大学・大学院医学系研究科・助教 研究者番号 40794037

### (2)研究協力者

畑山 博 (HATAYAMA, Hiroshi) 医療財団法人今井会足立病院 院長

白岩 八千代 (SHIRAIWA, Yachiyo) 医療財団法人今井会足立病院 看護部長

有松 有希子 (ARIMATSU, Yukiko) 医療財団法人今井会足立病院 助産師

伊達 文子 (DATE, Fumiko) 医療財団法人今井会足立病院 助産師

安藤 光子 (ANDO, Mitsuko) 医療財団法人今井会足立病院 助産師

石井 直子 (ISHII, Naoko) 医療財団法人今井会足立病院 助産師

佐々木 理江 (SASAKI, Rie) 医療財団法人今井会足立病院 助産師

松枝 加奈子 (MATSUEDA, Kanako) 大阪大学・大学院医学系研究科・博士前期課程(H28,29)

安里 舞子 (YASUZATO, Maiko) 大阪大学・大学院医学系研究科・博士前期課程(H29,30)

安井 渚 (YASUI, Nagisa) 大阪大学・大学院医学系研究科・博士前期課程(H28,29)

川原 妙 (KAWAHARA, Tae) 大阪大学・大学院医学系研究科・博士後期課程(H29,30,31)